The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

パーリ資料にみられるBhesajja

井　上　綾　瀬

0．はじめに

漢訳仏典で「薬」と訳されるBhesajjaは，食事と重複する物質が多い．仏典で「薬」とよばれる物質は，往々にして「食事」の内容と重なりがある[1]．翻訳研究でもBhesajjaは「薬」と理解され[2]，西本［1955］，佐藤［1963］，平川［1994］など，おもな律文献の先行研究の中でもBhesajjaは，「薬」の意味で研究される．しかし，そのなかで食事と薬の2つに注目すれば「仏教ではすべての食物を「薬」と受けとめている．」に代表される見解がある[3]．これは，漢訳諸律文献の中で「時薬[4]」という概念が存在するためであると同時に，比丘の生活上の心構えとして身体を健康に保つという考え方があるためである．さらに，平川［1994］では「時薬をyāvakālika-bhesajja」と論じる[5]が，Vinに同様の単語はなく，yāvakālika（時内のもの，つまり正午までの食事）の語がある．これらを踏まえると比丘の食事と薬の関係が曖昧である．そのため，Bhesajjaの語に食事の意味が含有しないことを証明したい．

1．Bhesajjaの使用実例

パーリの経と律のなかで使用されるBhesajjaは，大きく3つに分類できる．第一に一般的な薬を表す場合，第二に特定の使用法や特定の症状のための薬を表す場合である．注目すべきなのは，第二の用法で食事と薬が明確に区別されている．以下は，Mūla-bhesajjaに関する記事である．

Tena kho pana samayena gilānānaṃ bhikkhūnaṃ mūlehi bhesajjehi attho hoti. Bhagavato etamatthaṃ ārocesuṃ. anujānāmi bhikkhave, mūlāni bhesajjāni, haliddiṃ siṅgiveraṃ vacaṃ vacatthaṃ ativisaṃ kaṭukarohiṇiṃ usīraṃ bhaddamuttakaṃ. Yāni vā panaññānipi atthi mūlāni bhesajjāni neva khādanīye khādenīyattaṃ pharanti, na bhojanīye bhojanīyattaṃ pharanti, tāni paṭiggahetvā yāvajīvaṃ pariharituṃ, sati paccaye paribhuñjituṃ. Asati paccaye paribhuñjantassa āpatti dukkaṭassā'ti.（Vin1, pp.200-201）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ある時，病気の比丘たちに根の薬（mūla-bhesajja）は効果があった．世尊にこれの効果を申し上げた．「比丘たちよ，根の薬［つまり］haliddi, siṅgivera, vaca, vacattha, ativisa, kaṭukarohiṇi, asīra, bhaddamuttaka, これら，或はまた，これら以外の khādaniya を［食べようとする］ときに khādaniya として役に立たなく，bhojaniya を［食べようとする］ときに bhojaniya としても役に立たないような根の薬，これらを受け取って，生きている間持ち運ぶこと，［摂取するべき］理由のあるときに食べることを許可する．理由が無いときに食べると悪作の罪になる」と．

khādaniay と bhojaniya が比丘の正午までの食事 yāvakālika の内容なので，以上の記事より Bhesajja が食事の役に立たないことが理解できる．また，たとえ Bhesajja が小腹の足しになろうとも理由が無い時に摂取すると罪が生じる．これをもとに個々の Bhesajja の確認を行う．

1．1．一般的な薬としての意味で使用される場合

Bhesajjaṃ paṭisevitā hoti 薬を用いて［治癒を］なす

Bhesajjatthāya moctei［精液を］薬にする為にもらす

Cīvara-piṇḍapāta-senāsana-gilānapaccayabhesajja-parikkhāra 衣食住医薬の資具

Gilānapaccaya-bhesajja 病人の必需品である薬

Sappāya bhesajja 適当な薬（症状に適した薬）

Nānā-bhesajja 様々な薬

上述の他にも Bhesajja の用例は多数ある．これらの中で bhesajja は「薬」を示しているのであって「食事」は示さない．Bhesajja という語は，比丘が風邪にかかった場合は風邪を治す為に飲んでも良い「薬」の意味で使用され，信者が布施をしたい場合には手段としての「薬」になる．

1．2．特定の薬を指す場合

Pūtimutta bhesajjāna 陳棄薬

Pañca bhesajja 五種薬（病気の際 7 日間保持してよいもの）

Vasa bhesajja 脂肪の薬（五種薬の一種）

Mūla bhesajja 根の薬（生涯保持できる薬）

Kasāva bhesajja 渋い薬（生涯保持できる薬）

Paṇṇa bhesajja 葉の薬（生涯保持できる薬）

Phala bhesajja 果実の薬（生涯保持できる薬）

Jatu bhesajja 樹脂の薬（生涯保持できる薬）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Loṇa bhesajja 塩の薬（生涯保持できる薬）

Cuṇṇa bhesajja［皮膚のかゆみの為の］粉薬

Bhesajja vijāyeyya 妊娠薬

Bhesajja na vijāyeyya 避妊薬

これらは，特定の疾患，及び，症状に合わせた薬や，使用法の限定された総合薬であり，食事として用いる事は出来ない．従って，上記の Bhesajja の使用例においても意味は，薬にしぼられる．

1．3．薬に関する事柄を指す場合

Bhesajjatthavika 薬袋[6)]

この用例は少ないが 1.1. や 1.2. の薬の貯蔵に関する用例であるため「薬」と翻訳する以外に読めない．

2．おわりに

パーリ資料にある Bhesajja の語の使用法は「薬」の意味しか存在しない．食事と結びつく Bhesajja の使用例は無かった．

漢訳諸律文献に見られる「時薬」の指す内容は正午までの食事のことであり，Vin の yāvakālika が指す内容と同じである．しかし，時薬を yāvakālika-bhesajja と考える事は出来ない．Vin には，yāvakālika-bhesajja という語が無いだけでなく，食事はすなわち薬であるという概念もない．Vin では，薬と食事は完璧に分けられた存在である．漢訳諸律文献との差異は，部派や地域，時代背景の違いによるもの[7)]，また翻訳時に理解しにくい食事と薬の関係を分かりやすく言葉を整理した事によって起こったと考えられる．

Bhesajja に食事の意味が無いため，薬犍度に食事に関する記事が含まれる根拠がない．しかし，理由としては以下のように考えられる．薬犍度に描かれる食事に関する記事は，経分別の決まりに則った上での個々の事例の紹介が多い．それらは経分別の因縁譚や解説では，カバーしきれなかった事例について薬犍度に挿入される．この場合，薬犍度の因縁譚は，短い場合と長い場合がある．短い場合は，比丘が生活上困難な場合に例外を求めるという簡潔な内容であり，登場人物は世尊以外特定できない．長い場合は，登場人物が多く問題解決に直結しない話も含まれる．Vin の薬犍度では半分が薬に関する記事で，半分が食事に関する記事である．薬犍度には，薬以外の記事も含める素地があった可能性や，成立する

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

まで様々な話が挿入された可能性が考えられる．

1）ただ，比丘の保持の方法によってのみ，その物質が「薬」となるか「食事」となるか決定づけられる．

2）PED p.509 a remedy, medicament, medicine.『パーリ語佛教辞典』p.683, 薬, 薬品, 医薬, 薬物，薬資具，-tthavika 薬袋，-sannidhikārasikkhāpāda 薬物貯蔵学処，-sikkhāpada 薬物学処『パーリ語辞典』p.247，薬，医薬，薬物．

3）仏教ではすべての食物を「薬」と受けとめている．そして健康な比丘は食物の貯蔵をしないで，食物はその日の乞食によって受けて午前中に食べる．これを「時薬」という．（平川［1994］II，p.432）

4）五分律，摩訶僧祇律，四分律，十誦律，根本説一切有部毘奈耶薬事，根本説一切有部毘奈耶雑事など．

5）Vin の yāmakālika に薬の意味が含まれていればわざわざ bhesajja を付加しなくても yāmakālika の意味は「時内のうちの薬でもある食事」となり，漢訳と共通する概念になる．しかし，yāvakālika に薬の意味は無い事を拙稿で確認しているので bhesajja に他の意味がないか検討の必要性が出てきた．

6）1.1 から 1.3 に示した Bhesajja の用例は参考文献に挙げたパーリ資料に多数存在する．

7）テキストの所属部派により地域が異なり食事の内容や薬に使用できる植物や鉱物に変化がある．医学は病気を治療する事よりも健康を保つ事を重視するインドのアーユルヴェーダや医食同源と言われる中国の背景がある．

〈資料，参考文献，及び，略号〉

Aṇguttara-nikāya, *Dīgha-nikāya*, *Kuddaka-nikāya*（Udāna, Iti-vuttaka, Sutta-nipāta, Peta-vatthu, Thera-gāthā, Jātaka, Niddesa（Mahā-niddesa), Apadāna), *Majjima-nikāya*, *Saṃyutta-nikāya*, *Samantapāsādikā*, *Vinaya piṭakaṃ*（PTS 版使用）

Critical Pāli Dictionary, Vol.1, part 2, U.Trenckner, Copenhagen, 1929

A Dictionary of Pāli, Part 1, Cone, M., PTS, Oxford, 2001

Pāli-English Dictionary,（First print, 1921), Davids, R., Stede, W., Reprint, New Delhi, 1994

The Practical Sanskrit-English Dictionary, V. S. Apte, Kyoto,（First published, 1957）1978

A Sanskrit-English Dictionary, Monier Williams, Oxford,（First published, 1899）1982

佐藤密雄『原始仏教教団の研究』1963，山喜房佛書林（佐藤［1963］）

辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫，1975

西本龍山『四分律比丘戒本講讃』1955，西村為法館（西本［1955］）

平川彰『二百五十戒の研究』1～4，平川彰著作集 14～17 巻，1993～1994，春秋社（平川［1994］）

〈キーワード〉 Bhesajja, Vinaya, Nikāya, 薬，食事

（龍谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service